

2014 年 7 月 19-21 日、愛知県犬山市の犬山国際観光センター「フロイデ」において日本動物心理学会第 74 回大会が開催された。開催校は京都大学霊長類研究所である。大会長は松沢哲郎、準備委員長は友永雅己。そして、足立幾磨、林美里、服部裕子らの事務局のもとで実施した。

大会は、日本動物心理学会としてはその長い歴史上最初の試みとして、すべての学術プログラムを英語で実施した。これは、2016 年に日本で 42 年ぶりに開催される国際心理学会(ICP)大会に向けて、各学会で取り組んでいる英語での発表という試みの一環でもある。幸い、当日参加を含めて 244 名という多くの参加者があった。発表件数も、口頭発表 45 件、ポスター発表 64 件（うち学部生発表 5 件）だった。100 件を越す例年並みの発表数があり、英語での活発な議論がなされた。

大会のもうひとつの特徴は海外から多数の参加を得たことである。大会本体として、海外から 5 名の方を招へいし、それぞれ特別講演や一般発表においてお話をいただいた。Ralph Adolphs, Raman Sukumar, Michael Platt, Elizabeth Brannon, Maciej Trojan である。主として日本学術振興会先端拠点形成事業「心の起源を探る比較認知科学研究の国際連携拠点形成」の助成を受けたものである。

これに加えて、現在進行している 2 つの科学研究費新学術領域研究から「特別シンポジウム」をオーガナイズ(共催)していただいた。ひとつは、新学術領域「共感性の進化・神経基盤」による”Higher behavioral functions in animals; their mind and evolution”である。もう一つは新学術領域「こころの時間学 - 現在・過去・未来の起源を求めて - 」による”The science of mental time”である。それぞれのオーガナイザーである長谷川壽一・菊水健史文氏と、北澤茂・平田聡氏に深く感謝したい。これに伴い、海外からの講演者として Josep Call, Peggy Mason, Michael Beran の 3 氏が参加した。

大会最終日の午後には、科研費「研究成果公開促進費」の援助を受けた公開シンポジウム”Frontiers in Comparative Cognitive Science: In search of the origin of Mind”をおこなった。3 日間連続の最後のプログラムであるにもかかわらず、多くの方々にご参加いただいた。Robert Hampton, John Iversen, Vincent Janik, Klaus Zuberbühler の 4 氏によって最先端の研究成果をわかりやすく講演していただいた。

以上、海外からの招聘は、アメリカ、イギリス、ドイツ、スイス、ポーランド、インド、6 か国 12 名だった。また霊長類研究所等の大学院生など外国籍の参加者も多かった。したがってフランス、カナダ、中国、韓国が加わるので、日本を含めて 11 か国の参加者があったことになる。

犬山の 7 月は予想通り暑く、また、夕方には雷雨に襲われたが、それらを跳ね飛ばす熱気が会場内には常に感じられる大会であった。大会に参加していただいた皆様、そして大会運営スタッフに、改めて心より感謝申し上げたい。

本大会は、京都大学霊長類研究所を開催校として、犬山市教育委員会、京都大学「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」、京都大学「心の先端研究ユニット」の後援のもと実施された。また、日本学術振興会先端拠点形成事業「心の起源を探る比較認知科学研究の国際連携拠点形成」の援助を受けた。これらを明記して、関係各位の支援に深く感謝申し上げたい。

2014 年 7 月 25 日
日本動物心理学会第 74 回大会
準備委員長 友永雅己

